ふたり前の元彼はキショすぎる

登場人物

新村実也子（20-28）大学生
遠藤汰一（20-24）実也子の同級生
神崎ののか（20-24）実也子の同級生
倉橋京香（19-23）実也子の後輩
佐川栄介（20-22）実也子の同級生
柴田洋一郎（27）　公務員
佐原優実（20）　実也子の同級生

あらすじ

ある日突然彼氏の姿が見えなくなった大学生の新村実也子。彼氏、ヨウスケの声も、写真も認識できなくなった。医者にかかるが、目や脳に問題はなく、原因が分からない。友人の神崎ののかや遠藤汰一が心配する中、実也子は冷静だった。浮気性で喧嘩が絶えなかったヨウスケの姿が見えなくても、生活に一切支障はないのだ。いいきっかけだと、実也子はヨウスケと別れる決意をする。ヨウスケと別れたことを聞いた汰一は、今まで秘めていた実也子への思いを告白する。友達である汰一が告白することにヨウスケは何も言ってこなかったと聞き、実也子は汰一と付き合うことにする。

相変わらずヨウスケの姿は見えないまま、汰一と交際している実也子。だが汰一は、実也子がまだヨウスケに気があるのではないかと嫉妬が絶えない。ののかや、後輩の倉橋京香からも優柔不断な態度を責められた実也子は、姿が見えなくてもヨウスケとけじめをつけようとするが、ヨウスケの新しい彼女に邪魔され、諦めることに。自分と真正面から向き合ってくれる汰一のことだけを大切にしようと決意する。

実也子と汰一は順調に交際を続け、やがて就活の時期を迎えた。そこで将来に対する意見の食い違いから衝突することが増えた。言い争いの中、未だにヨウスケのことを気にする汰一に実也子が呆れ果て、別れようとする

と、二人に一本の連絡が入る。共通の友人の死により、再び一緒にいることを選んだ実也子と汰一。

社会人になった実也子は、マッチングアプリで出会った柴田洋一郎と食事をしていた。汰一とは別れ、新しい相手を探していたのだ。洋一郎と付き合うようになると、元彼の話も軽く受け流す洋一郎に、安心感を覚える実也子。

洋一郎と結婚の話が出る中、出席したののかの結婚式で汰一と再会する。こちらを気にしないそぶりを見せる汰一に、実也子は自分も結婚すると伝える。もう自分に気持ちはないと悟った実也子は、洋一郎との結婚を強く望むようになる。

実也子にはもう一つ心残りがあった。それはヨウスケのことだ。意を決し、実也子はヨウスケに連絡を取り、会いたいと伝える。待ち合わせの場所に着いた実也子は、そこにヨウスケがいるかは分からない。だが自分の思いを伝え、気持ちに踏ん切りをつけた。帰宅すると、ヨウスケからメールが届く。それを見た実也子はヨウスケの連絡先を消す。

数年後、母親になった実也子。子どもが指さす方を見るが、誰もいない。実也子は姿の見えない相手に微笑みかけ、中指を立てるのだった。

○アパート・寝室（夜）

実也子の声「もう顔も見たくない！」

新村実也子（20）、入って来て乱暴にドアを閉める。

布団にもぐりこむ。

布団の中から漏れる実也子の泣く声。

× × ×

朝になった。

布団から顔を出す実也子。

目をこすりながら辺りを見渡し、ため息をつく。

○同・玄関前（朝）

実也子、玄関の鍵を閉め、歩き出す。

実也子の後ろから鍵が開く音。

○住宅街（朝）

実也子、歩いている。

と、急に後ろから腕を掴まれる。

驚いて振り返る。

が、誰もいない。

辺りを見渡す実也子。

実也子「……いやぁ！！」

実也子、走って逃げる。

○大学・講義室（朝）

実也子、走って入って来る。

席についている神崎ののか（20）を見つけ、駆け寄る。

実也子「（息を切らしながら）やばいんだけど！」

ののか「え、何？　どうしたの」

実也子「……おばけに手掴まれた」

ののか「は？　どういうこと？」

実也子「誰かに手引っ張られたんだけど、周り見ても誰もいなくて！」

ののか「それって気のせい、とかじゃなく？」

実也子「違う！　確かに掴まれたの！」

ののか「え、心霊現象ってやつ？　こわぁ」実也子「やばいよね。お祓いとか行った方がいいかな」

ののか「待って調べてあげる」

ののか、スマホを操作する。

実也子、辺りを見渡して、

実也子「ていうか、ねぇ、ヨウスケ見なかった？」

ののか「ヨウスケ？」

実也子「昨日うち来てたんだけど朝起きたらいなくって。先大学行ったのかなって」

ののか「何言ってんの？」
実也子「え？」
ののか、実也子の背後を指さし、
ののか「後ろにいるじゃん」
実也子、振り返る。
が、誰もいない。
実也子「……え？」

○同・自習室
遠藤汰一（20）、空席の椅子を指さし、
汰一「ここにヨウスケいるんだけど」
実也子「……どこに？」
ののか「実也子、本当に見えないの？」
汰一「喧嘩して嫌になったから、見えないふりしてる、とかじゃないよね」
実也子「確かに喧嘩してるけど、本当にここにヨウスケがいることが分かんないの」
ののか「私と、汰一は見えてんだよね？」
実也子「うん」
ののか「ガチでヨウスケのことだけ見えないの？」
実也子、空席の椅子を見つめ、
実也子「……うん」
ののか「（椅子に向かって）最低」
汰一「（椅子に向かって）お前は何でそういうこと言うん

だよ」
実也子「え、なんかヨウスケ言ってる？」
汰一「声も聞こえない？」
ののか「（椅子に向かって）お前、聞こえないからって」
実也子「え、何て？」
ののか「実也子のこと――」
汰一「（遮って）姿もダメ、声もダメ。あ、文字は？」
ののか「そうだ、ヨウスケ、なんか実也子に送ってみて」
スマホの着信音。
実也子、スマホを見る。
『ようすけ』から『ねぇ』とメッセージが来ている。
実也子「届く」
汰一「んー、物を通せば行けるってことか？」
実也子「あれ？」
汰一「うん？」
実也子「ヨウスケ、アイコン確か顔写ってたよね？　ただの風景になってんだけど」
ののか、実也子のスマホを覗き込む。
ののか「え？　変わってないけど。去年のバーベキューのときの写真でしょ？」
実也子、スマホを操作する。
アルバムアプリを開くと、実也子しか写っていない写真ばかり。

実也子「これ、ヨウスケと撮ったはずなのに私しか写ってない」

実也子、スマホを汰一とののかに見せる。

汰一とののか、顔を見合わせる。

汰一「……ヨウスケも写ってるけど？」

実也子「え？」

実也子、スマホを見る。

不自然に隣が空いている実也子一人だけが写っている写真。

実也子「私だけ、見えない……」

○眼科・診察室

眼科医「えー、検査しましたが緑内障の症状も見られないし、視野が欠けている、っていうことでもないね」

実也子「はい」

眼科医「特に異常ないですよ」

実也子「あの、じゃあどうして人が見えなくなったんでしょうか」

眼科医「……もしかしたら脳外科とかの方がいいかもね」

実也子「脳の病気ってことですか？」

眼科医「それは検査してみないと分からなけど」

実也子「そう、ですよね」

○大学・食堂

明後日の方向を見ているののか。

実也子「どうした？」

ののか「いや別に。んで、眼科ではなんもなかったんだ」

実也子「うん。来週脳外科も行く」

ののか「うーん、どうしたもんかね」

倉橋京香（19）・佐川栄介（20）、歩いてくる。

京香「お疲れ様でーす」

ののか「おぉ、お疲れ」

京香「いいっすか、ご一緒しても」

ののか「どうぞー」

京香・栄介、実也子たちの席に座る。

京香「実也子さん、やっとヨウスケさんと別れたんですか？」

実也子「いや？　別れてないけど」

京香「とっとと別れればいいのに」

栄介「（たしなめるように）京香ちゃん」

京香「さっきも声かけられたのに無視するくらい嫌ってるじゃないですか」

実也子「え？　（ののかに）教えてよ」

ののか「別にいいって、ヨウスケが」

実也子「（京香に）どんなふうに？」

京香「え、いつも通りに。ねぇ実也子ーって」
実也子「そっか……」
ののか「で、二人はいつ付き合うんですか」
栄介「（苦笑いして）えっと」
京香「来月台湾から戻ったら告白してくれるらしいですよ」
ののか「またバックパッカー？」
周囲を見渡す実也子。

○アパート・寝室（夜）
ベッドに横になっている実也子。
部屋を見渡す。
スマホを手に取り、操作する。
『ようすけ』に『確認だけど今うちいないよね？』とメッセージを送る。

× × ×

スマホの着信音。
実也子、慌ててスマホを手に取る。
画面を見ると、『汰一』から電話がかかってきている。
実也子「（電話に出て）もしもし？」
汰一（電話）「あ、実也子。寝てた？」

実也子「ううん、起きてたよ」

○居酒屋・喫煙所（夜）

汰一「いやさっきヨウスケのスマホ見えて、実也子から連絡来てたから。あいつ返してないんだろうなーって」

実也子（電話）「あー、うん」

○アパート・寝室（夜）

汰一（電話）「どうした？　大丈夫？」

実也子「いや、なんか見えないのに部屋来てたらあれだなーって」

電話の向こうから女子の笑い声が聞こえて来る。

実也子「……来てないならもういいや」

○居酒屋・喫煙所（夜）

汰一「あの、先輩に誘われて、そんときは先輩たちだけって聞いてて」

実也子（電話）「うん」

○マンション・寝室（夜）

実也子「ありがとね、わざわざ。おやすみ」

汰一（電話）「病院、どうだった？」

実也子「あー、異常ないって。一応来週脳外科行くけど」
汰一（電話）「ＭＲＩ？　とか撮る感じか」
実也子「んー、分かんないけど」
汰一（電話）「ついてこうか？」
実也子「え、何で？」
汰一（電話）「なんか怖くね？　ＭＲＩって」
実也子「別に平気だよ。やったことあるし」
汰一（電話）「まじ？　いつ？」
実也子「小学生の時」

○居酒屋・喫煙所（夜）
汰一「そうなの？　なんで？」
実也子（電話）「頭ぶつけて。一応検査って」
汰一「なんでぶつけたの？」
実也子（電話）「滑り台から飛び降りる時に着地に失敗して」
汰一「えー、まじか。意外とやんちゃだったんだね」
実也子（電話）「（笑って）やんちゃって」
汰一「（微笑んで）俺もよく高いとこから飛び降りてたよ」

○マンション・寝室（夜）
実也子「バカだねー」
汰一（電話）「さすがに頭は打ってないけどね」

実也子「ん。じゃあおやすみ。連絡ありがと」
汰一（電話）「うん。おやすみ」
実也子、電話を切り、スマホを放り投げる。

○居酒屋・喫煙所（夜）
汰一、実也子との着信履歴が表示されたスマホ画面を見つめている。

○大学病院・診察室
脳外科医「脳ね、見たんだけどこも異常ないですね」
実也子「えー……」
脳外科医「ある特定の人の姿だけ見えない？」
実也子「あと声も聞こえないです」
脳外科医「んー、脳に原因はなさそうだけど」
実也子「そうですか……」
脳外科医「あれだったらうち精神科あるけど。そっちに行く？」
実也子「精神科……」
脳外科医「ただねー、今新患は三か月待ちなんだよね。生活に支障出てるとかなら急がせるけど、どう？」
実也子「生活に支障……。特にないです」

○マンション・リビング（夜）
荷物を整理している実也子・ののか・京香。

京香「あー、もうお揃いのものは捨てる！」
マグカップを手に持っている実也子。
実也子「え、でも片方はヨウスケに返すし。
別にペア物には見えなくない？」
京香「いいですか。男を捨てる時は荷物思い出、その他
もろもろすべて捨てるんです」
ののか「捨てろ捨てろー」
実也子「でも結構これかわいいし」
京香「いりません、ゴミです」
京香、実也子からマグカップを奪ってゴミ袋に入
れる。
実也子「二人ともごめんね、面倒なことに巻き込んじゃ
って」
京香「（片付けながら）やっと目が覚めたんで
すね」
ののか「いいの？」
実也子「うん。……もう意味ないなって」
実也子、男物のTシャツを丁寧に畳む。
京香「はいこれは返すやつですね」
京香、Tシャツを段ボール箱に放り投げる。

○大学・廊下
歩いている実也子。
汰一、実也子に駆け寄る。

汰一「実也子」
実也子「ヨウスケの話でしょ」
汰一「荷物送られてきたって」
実也子「着払いでね」
汰一「別れるん、だよね」
実也子「そのつもりで送った」
汰一「別れようって、話になったの？」
実也子「話せないのに別れ話なんて無駄でしょ。そんなんしなくても分かったと思うし」
汰一「うん、分かってた」
実也子「ならオッケ」
汰一「実也子はそれでいいの？」
実也子「いいよ」
汰一「実也子」
汰一、実也子を見つめる。
実也子「何？」
汰一「俺実也子のことずっと好きだった。付き合ってほしい」
実也子「え？　あ、ウケる」
汰一「冗談じゃなくてマジなやつだから」
実也子「え、あ、マジなやつか」
汰一「うん」
実也子「それさ、うちら付き合った場合、汰一くんヨウ

スケとどうなるの？」
汰一「あー、大丈夫」
実也子「大丈夫？　ヨウスケとは縁切れてもいいってこと？」
汰一「違くて。……ヨウスケには話してある」
実也子「何を？」
汰一「俺が実也子のこと好きで、実也子に告白すること」
実也子「……ヨウスケは何て？」
汰一「それ答えたら実也子の返事変わる？」
実也子「……変わらないよ」
汰一「分かったって。そう言ってた」
実也子「そっか」
実也子、周囲を見渡す。
誰もいない。
実也子「付き合お」

○居酒屋・店内（夜）
学生たちが飲み会をしている。
京香「やっぱあれですか？　ヨウスケさんと殴り合いの喧嘩したんですか？」
汰一「河原でね」
実也子「はいはい。ちょっとトイレ」
実也子、立ち上がる。
京香「あ、連れションしましょー」

実也子・京香、トイレに向かう。

汰一「実也子、まだヨウスケのこと見えないんだよね」

ののか「うん。どうしたもんかね」

汰一「うん……」

○同・女子トイレ（夜）

洗面台で手を洗っている実也子。

京香「実也子さん本当に汰一さんと付き合うんですか？

汰一さん優しいですよ」

実也子「いいことじゃない」

京香「てっきり実也子さんはドエムなのかと」

実也子「何でよ」

京香「だって、あのクズの権化ヨウスケさんとなかなか

別れなかったじゃないですか。プレイの一種かと」

実也子「違うよ」

京香「まじヨウスケさんのどこが好きだったんですか？

顔？」

実也子「……思い出せないなぁ」

○繁華街（夜）

並んで歩いている実也子と汰一。

実也子「二次会よかったの？」

汰一「朝までになりそうだったから」

実也子「そっか。ねぇ、今日ってヨウスケいた？」

汰一「いないよ」
実也子「本当に？」
汰一「本当だよ。何で俺が嘘つくの」
汰一、歩くスピードが速くなる。
実也子「え、怒ったの？」
汰一「怒ってないよ。ただ何で俺と付き合ったのにヨウスケのこと気にしてんのか理解できないだけで」
実也子「単純にいたかどうか分かんないから聞いただけで」
汰一「分かったよ」
実也子「ねぇ、汰一くん」
汰一「いるときはいるって言うし、いないときはいないって言うよ」
実也子「付き合いたてで早速喧嘩になるのはやだよ」
汰一、立ち止まる。
汰一「……ごめん」
実也子、小さくため息をつき汰一の手を握る。
実也子「今日うち泊まる？」

○アパート・寝室（夜）
ベッドで眠っている汰一。
汰一の寝顔を見つめる実也子。

○大学・講義室

汰一「今度はさ、ここ行かない？」
汰一、実也子にスマホを見せる。
実也子「あー、いいね」
汰一「俺はね、次休みが」
汰一、スマホを操作する。
実也子、ふと講義室を見渡す。
汰一に目線を戻すと、まっすぐこちらを見つめている汰一。
汰一「ヨウスケのこと探してた？」
実也子「は？　違うよ」
汰一「だって今」
実也子「ののか。ののかのこと探してたの」
佐原優実（20）、実也子の元に来て、
優実「ちょっといいですか」
実也子「え、あ、はい」
汰一「（優実に）ちょっと」
優実、入口の方を見て気づいて、
優実「（慌てて）あっちで」
実也子「あ、あぁ、はい？　（汰一に）行ってくる」
実也子、優実のあとを追う。
入り口の方を見るが、何もない。
汰一、実也子の背中を心配そうに見送る。

○同・中庭
優実「クズですね！」
実也子「え、は？」
優実「性格悪すぎない？　人として終わってるよ！」
実也子「え、誰が？」
優実「あんただよ！」
実也子「はぁ？　てかあなた誰ですか？」
優実「は？」
実也子「え？」
優実「分かるでしょ？　彼女です！」
実也子「……誰の？」
優実「ヨウスケくんの！」
実也子「ヨウスケの彼女さんが私に何の用ですか」
優実「いくら別れたとはいえヨウスケくんの友達と堂々と付き合うってどうなの？」
実也子「いや別にそれは」
優実「私は分かるの。ずっとそばにいるから。友達も失って、ヨウスケくんは孤独なんだから」
実也子「そう、ですか」
優実「ヨウスケくんのあの顔見て何とも思わないの？」
実也子「……思いませんね」

○同・廊下

歩いている実也子。

汰一、駆け寄って来る。

汰一「実也子！　大丈夫だった？」

実也子「あー、なんか変なのに絡まれちゃって」

汰一「ごめん。俺が行かせなきゃよかったよね」

実也子「ヨウスケの新しい彼女だって」

汰一「うん……」

実也子「あ、知ってる？」

汰一「ヨウスケと最近一緒にいるから」

実也子「へー」

汰一「何だって？」

実也子「んー、なんか勘違い？　どうでもいいよ」

○レストラン・店内（夜）

汰一、メニュー表を見て、

汰一「実也子何飲む？」

実也子「うーん。ソフドリでいいや」

実也子、メニュー表の一番最後のページを開く。

汰一「……ここ来たことある？」

実也子「あー、うん」

汰一「誰と？」

実也子「忘れた」

汰一「ヨウスケと？」
実也子「……かもね」
汰一「何でそういう嘘つくの？」
実也子「別に嘘っていうかわざわざ言うことでもないでしょ」
店員、おしぼりを持ってきて、
店員「失礼します。お飲み物お決まりでしょうか」
汰一「帰ります」
実也子「ちょっと」
汰一、席を立つ。

○繁華街（夜）
早足で歩く汰一。
実也子、汰一のあとを追いかける。
実也子「ねー、ごめんって」
汰一「ごめんって何？　何に対して謝ってんの？」
実也子「じゃあ何に対して怒ってんの」
汰一、立ち止まり実也子を見る。
汰一「ヨウスケと来たことあるなら最初っから言えばいいじゃん」
実也子「忘れてたんだって。もう、ずっと何なの？　何でそんなにヨウスケのこと気にするわけ？」
汰一「だって実也子が気にしてるから」
実也子「してないよ」

実也子、汰一の手を握り、
実也子「私は汰一くんが好きだよ」
汰一「……うん」
実也子「ね、ああいうのはやめよう？　お店に迷惑」
汰一「ごめん」
実也子「うん」
実也子、汰一と手を繋ぎ歩き始める。

○同・講義室
一人座っている実也子。
ふと遠くの方を見ると、優実が座っている。
隣には誰もいない。
じっと優実の方を見つめる実也子。
栄介、実也子の前の席に座って、
栄介「お疲れ様」
実也子「あれ、栄ちゃんもこの授業取ってたっけ」
栄介「うん。最初の方は出れてなかったけど。これ、台湾のお土産」
栄介、実也子にストラップを渡す。
実也子「えー、かわいい。ありがとう」
栄介「どういたしまして」
実也子「あれ、台湾から帰ってきたってことはいよいよ京香ちゃんに告白？」
栄介「う、うーん」

実也子「百パー成功するのに何でずっと渋ってんの？
京香ちゃん待ってるよ」
栄介「自信ないんだよね。京香ちゃんを幸せにできるか」
実也子「えー、真面目」
栄介「俺京香ちゃんのこと愛してるんだ」
実也子「お、おぉ、すごい……」
栄介「だからこそ恋人って関係になったら我慢してた嫉妬とかもしちゃうし、それが負担になったりしたら」
実也子「えー、アジア一心広い栄ちゃんが？」
栄介「好きな人にだったら男はみんなそうなるよ。汰一だってそうでしょ？」
実也子「汰一くん、ねぇ」
栄介「実也子のことずっと好きだったから、余裕ないんだよ。ましてやヨウスケが元彼なわけだし」
実也子「ヨウスケなんか気にしなくてもいいのにね。向こうだって全然気にしてないんだし」
栄介「そうかな」
教授、入って来て教壇に立つ。
栄介、前を向く。
実也子、優実を見る。
優実の隣には誰も座っていない。

○同・食堂
テーブル席に座っている実也子・ののか・京香。

優実、ズンズン歩いて来て実也子の前に仁王立ちする。
優実「さっきヨウスケくんのことチラチラ見てたよね？」
実也子「……見えてないです」
京香「この人誰ですか？　敵なら私やっちゃいますけど」
ののか「ヨウスケの新しい彼女でしょ。大丈夫。実也子はこういう女の対応、しょっちゅうだったから」
京香「クズと付き合うとそんなスキルが身に付くんですね」
優実「あんたとっくにヨウスケくんに捨てられてんの。未練がましいんだよ」
京香「どっちかっていうとヨウスケさんが捨てられたんじゃ」
優実「もう別れたんだったら関わらないでくれない？あんたがいつまでも付きまとうからヨウスケくんはおかしくなっちゃったんだ！」
実也子「ヨウスケが？」
優実「私がいるのに他の女と連絡取ったり飲みに行ったり……」
実也子「……平常運転では？」
優実「はぁ？　そんなわけない！　どうして私がこんな思いしなきゃなんないの！」
ののか「ヨウスケと付き合うならそこらへん覚悟しなきゃ。ね、実也子」

優実「とにかくもう関わらないで！」
優実、走って去っていく。
ののか「別れてもああいうのの対処させられるんだね」
実也子「ほんと。こっちは見えないってのに」
京香「見えない？」
実也子・ののか、顔を見合わせる。

○同・講義室
京香、実也子にスマホを見せる。
実也子、首を横に振る。
京香「マジっすか」
実也子「マジです」
ののか「別に目とか脳に問題があるってわけでもなかったんだよね」
京香「不思議なこともあるもんですね」
実也子「だよね」
京香「てかあれですか？　別れたのって見えなくなったことが原因ってことですか？」
実也子「うん、まぁ、そうなるかな。会話もできないし」
ののか「声も聞こえないんだって」
京香「じゃあヨウスケさんと直接別れようって話し合ってないってことですか？」
実也子「まぁ、うん」
京香「（舌打ちして）結局これだよ」

実也子「え？」
京香「実也子さん、あんた結局寝ぼけたまんまなんですね」
ののか「京香？」
京香「結構前からイラついてたんですよ。実也子さんの態度。クズだ何だって愚痴る割に本人には言わなかったじゃないですか」
実也子「それは」
京香「別れ話すらしてないって。私実也子さんが一歩踏み出すためならって荷物片づけんの手伝ったんですよ？」
実也子「ごめん……」
京香「私クズと付き合うことをエモいってステータスにするバカ女嫌いなんですよ」
ののか「ちょっと京香、言いすぎだよ」
京香「ヨウスケさんが見えなくなったのって、実也子さんが逃げたからじゃないですか？」
京香、講義室から出て行く。

○同・廊下
並んで歩いている実也子とののか。
ののか「京香さ、実也子のこと大切に思ってんだよ。すっごい実也子になついてるでしょ？」
実也子「うん……」

ののか「だからちょっと口悪くなっちゃうんだよね。ヨウスケのこと、実也子を苦しめる敵だと認識してるから」
実也子「結構グサッと来ちゃった。そういえば私、逃げてばっかだなって。ヨウスケが浮気した時も、知らない振りしたり。連絡取れなくなっても、平謝りされれば許したり」
実也子、立ち止まる。
実也子「ヨウスケが見えなくなる前の日も、喧嘩したんだけどもう嫌になって、途中で逃げちゃったんだよね」
ののか「実也子……」
実也子「もっとちゃんと話し合ったりしてればよかったのかな。そしたら……」
ののか「……」
実也子「こんなんだから京香ちゃんにも怒られるんだね。ののかもイラついてたでしょ？」
ののか「まぁ、多少は」
実也子「だよね、ごめんね」
ののか「でも、実也子が結構ヨウスケのこと好きだって知ってたから、仕方ないのかなって」
実也子「私は……」

○アパート・リビング（夜）
スマホを見ている実也子。

画面には不自然に隣が空いている実也子一人だけが写っている写真。
『汰一』から電話がかかってくる。
実也子「（電話に出て）もしもし」
汰一（電話）「あ、実也子？　今何してた？」
実也子「……別に何も」
汰一（電話）「どうした？　なんか元気ないね」

○バー・裏口（夜）
電話をしている汰一。
実也子（電話）「まぁ……。京香ちゃんに叱られちゃって」
汰一「えぇ？」
実也子（電話）「今回はさすがに、私が悪すぎるし。京香ちゃんに許してもらえるかどうか」
汰一「大丈夫だよ」

○アパート・リビング（夜）
汰一（夜）「早く仲直りしてまたみんなで遊ぼうよ」
実也子「みんな？」
汰一（電話）「うん」
実也子「……」

○バー・裏口（夜）
汰一「俺もうバイト上がるんだけどこのまま実也子んち

行こうか？　二人で一緒に京香ちゃんに許してもらう方法考えようよ」

実也子（電話）「……いや、ごめん。私今日ちょっと眠くて」

汰一「そっか。うん、分かった。早く寝な？」

実也子（電話）「おやすみ」

汰一「おやすみ」

電話が切れる。

○アパート・リビング（夜）

実也子、スマホを見ている。

画面には、実也子・汰一・ののか・京香・栄介が写っている写真。

じっと写真を見つめる実也子。

○大学・食堂

テーブル席にいる実也子・汰一・ののか。

汰一「（気づいて）おー、栄ちゃん」

栄介、手を振って近づいてくる。

栄介「ほら京香ちゃん」

栄介の背中から顔を覗かせる京香。

京香「実也子さん、この間はすみませんでした」

京香、再び栄介の背中に隠れる。

実也子「ううん。大丈夫だよ」

京香「（栄介の背中に隠れたまま）嫌いになりましたか？」
実也子「嫌いになってないよー。おいでー」
京香、栄介の背中から飛び出し実也子に抱きつく。
汰一「あ、俺の彼女だぞー」
京香「いいじゃないですか！　こっちは人肌恋しいんですよ！」
ののか「ほらー、言われてるぞ栄ちゃん」
栄介「あははー」
はしゃぐ一同。
実也子、ふと遠くの席が目に付く。
誰も座っていないが椅子がこちらの方を向いている。
実也子「……」

○同・講義室（夕）
荷物を整理しているののか。
ののか「実也子、今日サークルの飲み行くの？　私は予定あるから行かないけど」
実也子「行かない」
ののか「そうなの？　汰一は行くって言ってたけど」
実也子「……汰一くんには、ののかと遊びに行くって言ってる」
ののか「え？」
実也子「……ごめん」

ののか「名前借りられたからには理由聞いてもいいよね？」
実也子「……ヨウスケと会う」
ののか「え？　見えるようになったの？」
実也子「ううん。でも、ヨウスケと話したくて。二人で会いたいって連絡した。このあと、ここで待ち合わせしてる」
ののか「でも声も聞こえないんでしょ？　だったら普通にラインで済ませれば？」
実也子「そうだけど。ヨウスケには私の顔見てもらいたくて」
ののか「……実也子。それはちょっとずる過ぎるよ。なんかあんた忘れられない元カノ枠狙ってない？」
実也子「狙ってないよ」
ののか「自分の気持ちだけ一方的に押し付けてすっきりしようとしてるわけじゃん。私、実也子の方が好きだけどヨウスケも一応友達だからさ」
実也子「私はただ……」
ののか「（ため息をついて）まぁいいんじゃない。別れ話って言いたいこと言ったもん勝ちだから」
実也子「ののか」
ののか「ただひとつ。いい女ぶらないこと。ヨウスケに恨み辛みひとつ残らず言うこと。分かった？」
実也子、頷く。

ののか「よし。汰一には一応これ墓場まで持っていくから」

ののか、出て行く。

× × ×

他の学生はいなくなった。

スマホを見つめている実也子。

ドアがガラッと開く音。

実也子、深呼吸する。

だんだん近づいてくる足音。

床に人影が映る。

実也子「――ヨウスケ」

実也子、振り返ると、女子学生が立っている。

実也子「え？」

女子学生「ヨウスケの元カノだよね？」

実也子「えっと、はい」

女子学生「もう別れたんだから連絡とかしないでくれる？」

実也子「え」

女子学生「あの女といい、何なの。元カノが連絡してくるとかキモイんですけど」

実也子「あの、ヨウスケは？」

女子学生「来るわけないじゃん。ヨウスケはあんたらの

ことなんて忘れてるから」
女子学生、出て行く。
呆然としている実也子。

○マンション・リビング（夜）
スマホの着信音。
実也子、慌ててスマホを手に取る。
『汰一』から電話がかかってきている。
実也子「（電話に出て）はい」
汰一（電話）「実也子？　今実也子んちの前なんだけど上がっていい？」
実也子「え？」
チャイムが鳴る。

○同・玄関（夜）
実也子、ドアを開けると汰一が立っている。
実也子「どうしたの」
汰一「会いたくなって」
実也子「そう……」

○同・リビング（夜）
汰一「ののかとどこ行ったの？」
実也子「え、普通にごはん」
汰一「そっかそっか。二人がいないから京香ちゃん寂し

がってたよ」
実也子「うん」
汰一の方を見ようとしない実也子。
汰一「あのさ」
汰一、実也子に向き合って、
汰一「最近の俺の態度、ちゃんと話し合いたくて」
実也子「え」
汰一「ごめん。俺、正直ヨウスケに嫉妬してた。あいつかっこいいし、モテるし、実也子にとって忘れられない元彼なんじゃないかって」
実也子、スマホを握りしめる。
汰一「だからちょっとでも実也子がヨウスケのこと気にするのが嫌で不機嫌になったりしちゃってました」
汰一、頭を下げる。
汰一「大人げなかったです。ごめんなさい」
実也子「……いや私も無神経だったし。ごめん」
汰一「これからも一緒にいてくれる？」
実也子「え、うん、もちろんだよ」
汰一「あー！　よかった！」
実也子「（笑って）え、何？」
汰一「いや緊張した。だってすっごい俺ださいよね？」
実也子「そんなことないよ」
汰一「でも絶対ちゃんと向き合わなきゃって思ってさ。実也子にも自分にも。あー、よかった」

実也子「……ありがと、汰一くん」
汰一「……実也子。ヨウスケのこと完全に忘れろとは言わない。でも、俺のこともっと好きになってくれると嬉しい」
実也子「……私が見てるのは汰一くんだけだよ」
汰一「付き合った時間とかは負けるけどこれから二人でいろんなとこ行って思いで作って――」
実也子、汰一にキスする。
実也子「汰一くんも、もう私をヨウスケの元カノとして見ないで」
実也子、汰一に抱きつく。

○大学・廊下
リクルートスーツを着た学生が往来する。

○同・自習室
汰一「はい、転勤は問題ございません。全国どこの支社でも御社に貢献したいと考えています」
向かい合って座っている実也子（22）と汰一（22）。二人ともリクルートスーツを着ている。
実也子「え」
汰一「ん？　早く次の質問してみて」
実也子「転勤オッケーなの？」
汰一「今から面接行くとこ全国転勤前提だよ？　無理で

すって言ったら即落とされるじゃん」
実也子「そっか」
汰一、お腹を擦る。
汰一「あー、就活ってほんと胃やられる」
実也子「大丈夫？」
汰一「大丈夫、大丈夫」
実也子「今日の夜ご飯おかゆとかにしてあげるね」
汰一「え、嬉しい。ありがとう」
実也子「それじゃあ、頑張って」
汰一「うん、行ってきます」
汰一、出て行く。
汰一の背中を見送る実也子。

○同・食堂
テーブルでノートを広げている実也子とののか（22）。
ののか「そういえば実也子はさ、Uターンとか考えてないの？」
実也子「うーん、ないかなぁ」
ののか「まぁそうか。汰一もこっちで就職でしょ？」
実也子「……たぶん」
ののか「たぶん？　そこ話し合ってないの？」
実也子「汰一くんが地方でやりたいことあるなら邪魔したくないし」

ののか「じゃあ実也子もそれについてけば？」
実也子「えー」
ののか「一回遠距離になっちゃったらきついよ？　結婚のタイミング逃すよ？」
実也子「結婚とかそんな」
ののか「考えたことないの？」
実也子「うーん」
　栄介（22）・京香（21）、近づいてくる。
京香「お疲れ様でーす」
栄介「大丈夫？　二人とも元気なさそう」
ののか「栄ちゃーん。私も栄ちゃんみたいに卒業後は海外行くことにしようかなー」
実也子「準備は順調？」
栄介「うん。最近はバイクの免許取った。向こうはバイク大国だから」
ののか「いいねー、栄ちゃんバイク似合いそう」
京香「もうハマっちゃってね。この人、彼女ほったらかしでヨウスケさんとツーリング行っちゃうんですよ」
実也子「……バイク乗るんだ」
京香「ヨウスケさん、栄介くんと一緒に学校通ってたんですよ」
ののか「え、待って。京香今彼女って言った？」
　京香、栄介と腕を組み、
京香「あ、紹介します。私の彼氏です」

○同・廊下
　歩いている実也子・ののか・京香。
京香「二人でボウリング行ったんですけど、ストライクだしたら付き合ってくださいって栄介くんが言いだして。ガーターだったんですけど付き合ってあげたんです」
ののか「よかったじゃーん！　おめでとう」
京香「ま、付き合うのは目に見えてましたけど」
ののか「とか言って嬉しいくせに」
実也子「栄ちゃんが卒業したらどうするの？」
ののか「あ。京香もついてくの？」
京香「まさか」
ののか「じゃあ遠距離恋愛だ」
京香「いいえ。私か海外か選ばせます」
実也子「え」
ののか「栄ちゃんはなんて言ってるの？」
京香「え？　まだ伝えてませんよ。卒業式の日に迫ります」
実也子「それで栄ちゃんが、その」
京香「海外選べばそこで終わりです。潔く別れますよ」
ののか「あんたそんなに重い女だっけ？」
京香「私は貴重な青春時代栄介くんに捧げてたんです。栄介くんも人生くらいかけてもらわないと」

実也子「なんか、すごいね……」

○マンション・リビング（夜）

汰一「今日一緒だった人がさ、ガクチカで留学の話してたの。面接官も聞き入っちゃって。俺も留学しとけばよかったなぁ」

実也子「あー、分かる。私のガクチカ、サークルしかないもんなぁ」

汰一「あ、そういえば聞いた？　栄ちゃんと京香ちゃん」

実也子「うん、聞いた。よかったね」

汰一「あの二人、卒業したら真っ先に結婚しそうじゃない？」

実也子「あー、うん」

汰一「（テレビを見て）あはは」

実也子「栄ちゃん、卒業したら海外行くじゃん？」

汰一「うん」

実也子「京香ちゃん、自分といるか海外行くか選ばせるんだって」

汰一「え、まじ？　それ結構きつくない？　栄ちゃんだってやりたいことがあって行くわけだからさぁ、それはかわいそうだよ」

実也子「汰一くんは？」

汰一「うん？」

実也子「汰一くんは私と離れるってなったらどうするの」

汰一「どうする、とは？」
実也子「だから就職して遠距離ってなったら」
汰一「まぁまだどうなるか分かんないけど」
実也子「なったときのことを考えて」
汰一「まぁ……。距離にもよるけど週末はどっちかが会いに行ってってなるんじゃない」
実也子「そうじゃなくて将来的に」
汰一「え」
実也子「結婚、とか」
汰一「結婚は、さぁ。まだお互い学生だし考えるの早くない？」
実也子「……あっそ」
汰一「俺だってちゃんと考えてるよ、そこらへんは」
実也子「もういいって」

○会社・会議室
面接官「ではあなたの将来のビジョンを教えてください」
実也子「はい。私は御社で営業職としてよりよいサービスの提供に努めたいと考えています。それには」
面接官「(遮って)あー、仕事じゃなくプライベート面で。うちは女性も全国転勤になりますけど、結婚とか出産とかになってもそんな配慮できないんですけど」
実也子「……そういうことは考えていないので大丈夫です」

○カフェ・店内

リクルートスーツ姿の実也子とののか、席に座っている。

ののか「はぁ？　やっぱその会社。本当はそういうの聞いちゃいけないんだよね」

実也子「まぁ向こうの気持ちも分かるけどね。採った新人すぐやめても困るんだろうし。ま、さっき次の選考は辞退しますってメールしたけど」

ののか「それでいいよー。こっちだって選ぶ立場なんだから」

スマホの着信音。

実也子、スマホを見る。

ののか「汰一？」

実也子「夜ご飯何するだって」

ののか「うわぁ、新婚さん？」

実也子「今日ののかんち泊まっていい？」

○アパート・リビング（夜）

缶チューハイを飲んでいる実也子とののか。

実也子「この前汰一くんと将来の話になったんだけど、ちょっと微妙な雰囲気になっちゃって」

ののか「男って結婚匂わされるとビビるからね」

実也子「私、正直ほっとしちゃって。汰一くんがそうい

うこと考えてないって」
ののか「ほっとしたの？　何で？」
実也子「私もそういうの考えられなかったから」
ののか「えー、同棲してんのに？」
実也子「同棲したからって結婚するとは限らないでしょ」
ののか「汰一とは考えられないってこと？　そもそも結婚願望無いってこと？」
実也子「どうかな」
ののか「でもすぐには考えられなくてもさ、ゆっくり考えていけばいいんじゃない？　汰一って結構優良物件だと思うよ」
実也子「うーん……」

○大学・食堂

テーブル席にいる実也子とののか。
栄介、実也子たちの席に近づく。
実也子「（気づいて）おー、京香ちゃんの彼氏」
栄介「あはは」
実也子「どうしたの？」
栄介「えっと」
栄介、自分の横をチラッと見る。
ののか「栄ちゃん、その優しさはいらない」
栄介「あ」
栄介、出口の方を見る。

実也子「え、何？　どうしたの？」
ののか「栄ちゃんどういうつもり？　ヨウスケ連れて来るなんて」
実也子「え」
栄介「やっぱり見えないんだ」
ののか「ヨウスケに何言われたの？」
栄介「俺はただ、このまま卒業なんて」
ののか「分かるけどさー。実也子は汰一と付き合ったわけだし、もう前みたいにとはいかないじゃん？」
栄介「最近ヨウスケも就活で悩んでるみたいで。みんなとまた遊べたらなと」
ののか「栄ちゃんのそういうラブアンドピースなとこ好きだけどさぁ」
実也子「いいよ、ののか。栄ちゃん、なんか巻き込んじゃってごめんね」
栄介「ううん、俺が勝手にしたことだから」
実也子「私はやっぱ、まだヨウスケのこと見えないから、栄ちゃんがヨウスケのこと支えてあげてくれるかな」
栄介「うん、分かった」
ののか「元彼にそこまで情けかけるかね」
実也子「別にそういうわけじゃ」
ののか「見えてないのにずっとヨウスケのこと見てるみたいだよ」
実也子「え」

実也子、出口の方を見つめる。

○マンション・リビング（夜）

スマホを見ている実也子。

汰一「実也子、話あるんだけど」

実也子「何？」

汰一「内定取れました」

実也子「え、おめでとう！　どこ？」

汰一「太陽商事」

実也子「え、すごーい。よかったね」

汰一「うん」

実也子「でも本命は宮市だよね？　就活続けるんでしょ？」

汰一「……いや、もう決めようと思って」

実也子「そうなの？　まぁそんな口出したりはしないけど、もったいなくない？　今の内定はお守りって感じにしてた方がいいんじゃない？」

汰一「転勤なしだし、ここからでも通いやすいし」

汰一、実也子をじっと見つめる。

汰一「実也子とずっと一緒にいれる」

実也子「……だめだよ」

汰一「え」

実也子「私のせいで夢諦めるとかはちょっと」

汰一「諦めるっていうか、そういう将来を考えたからっ

ていう」
実也子「私はそんなの考えてないけど」
汰一「俺と別れる気ってこと？」
実也子「そういうこと言ってるんじゃないじゃん」
汰一「だって俺との将来が考えられないって」
実也子「だから」
汰一「ヨウスケのときは考えた？」
実也子「……何で今ヨウスケが出てくるの？」
汰一「答えて」
実也子「今ヨウスケ関係ないじゃん」
汰一「ある」
実也子「ないでしょ」
汰一「答えて」
実也子「それ答えたら汰一くんの人生変わる？」
汰一「……変わらないよ」
実也子「じゃあ言っても意味ないから言わない」
汰一「嘘。変わるよ」
実也子「うん、言わない。私汰一くんの人生変えたくないもん」
汰一「……実也子は結局俺の人生に関わりたくないってこと？」
実也子「……そこまでは言ってないよ」
汰一「じゃあ俺ら一緒にいる意味なくない？　そんな俺の人生他人事みたいな人といる意味ないよ」

実也子「そうじゃない、そうじゃないけど」
実也子、汰一を見つめて、
実也子「汰一くんがそう思うならそうなんじゃない？」
スマホの着信音。
実也子・汰一、スマホを見る。
実也子「汰一くん」
実也子、汰一の腕にしがみつく。
汰一、実也子を抱きしめる。

○葬儀場・ロビー（夕）
喪服姿の実也子・汰一、入って来る。
ののか、駆け寄って来る。
ののか「実也子……！」
実也子、ののかの手を取る。
京香が通りかかる。
京香「おー、お疲れ様です」
実也子「京香ちゃん……」
京香「栄介くんのことだから地図にも載ってない離島とかが死に場所だと思ってたんですけどね」
京香、斎場の方を見て、
京香「近所でバイク事故とか」
汰一「大丈夫？」
京香「え？　大丈夫ですよ。あ、てか私黒紋付着たかったんですけど親族じゃないとダメみたいで。極妻みた

いでかっこいいんですけどねぇ」

○同・斎場（夕）

祭壇に飾られている栄介の写真。

実也子、焼香台の前で手を合わせる。

京香の方を見ると、うつむいて座っている。

○同・玄関（夕）

実也子「全然実感湧かない」

ののか「ご遺体もなかったからね」

汰一「結構、損傷がひどかったみたい」

実也子「栄ちゃん……」

泣いている人々が出て来る。

ののか「みんな辛いよね」

実也子「（ぼそっと）ヨウスケ、大丈夫かな」

汰一「……大丈夫だよ」

実也子「（ハッとして）私京香ちゃん見て来る」

実也子、葬儀場の中に入っていく。

ののか「嘘つくんだ」

ビクッとする汰一。

ののか「ヨウスケ、心配になるくらい泣き崩れてたのに」

汰一「……うん」

ののか「ま、隣に新しい女いたし大丈夫か。あれ新しい彼女でしょ？」

汰一「たぶん」
ののか「正直、あんなに泣くとは思わなかった」
汰一「二人で旅行とかも行ってたし、ヨウスケは特に栄ちゃんのこと好きだったから」
ののか「別に実也子に言ったって、汰一捨ててヨウスケのとこ戻るとかないよ？　ていうか今はみんなで支え合うときでしょ」
汰一「……だから俺ってダメなんだな」

〇同・ロビー（夕）
ベンチに座っている京香。
実也子、駆け寄って来る。
実也子「京香ちゃん」
京香「あ、お疲れ様でーす」
実也子「大丈夫？」
京香「なんかお腹空いちゃいました。寿司、寿司食べたいな」
実也子「京香ちゃん」
京香「あ、焼肉もいいなぁ。んー、中華もあり。にんにくマシマシ餃子とか」
実也子「みんなのところ行こう？」
京香「あ、なんか心配してくれてます？　彼氏が死ぬとか悲劇のヒロインムーブかましてますよね。でも全然大丈夫なんで！　彼氏っつっても付き合ったのは三

か月くらいだし、セックスも十回くらいしかしてないんで！」
実也子「京香ちゃん」
京香「気持ちが分かるとか言わないでくださいよ。死ぬのと、見えないだけのは全然違うんですから」
実也子「……」
京香「私は、私たちは逃げなかった。向き合って、これからってときに。なんで、なんで栄介くんなんですか」
実也子、京香を抱きしめる。
嗚咽を漏らしながら泣く京香。

○マンション・玄関（夜）
互いに清め塩をかけ合う実也子と汰一。
実也子、汰一の肩の塩を手で払う。
汰一「……実也子、俺たちさ」
実也子、汰一に抱きつく。
汰一「実也子？」
肩が震えている実也子。
汰一、気づいて実也子を抱きしめる。
実也子「汰一くん、どこにも行かないでね」
汰一「うん……」
実也子「ずっと一緒にいて」

○居酒屋・店内

実也子（24）、柴田洋一郎（27）とビールで乾杯する。

洋一郎「いやぁ、みーちゃん写真よりずっとかわいいね！」

実也子「いえ、そんなことないですよ。しばさんもいい人そうで」

洋一郎「あ、俺ね、柴田洋一郎。好きな風に呼んで」

実也子「あぁ、はい」

洋一郎「アプリで結構会ってるの？　いい人いた？」

実也子「んー、まぁぼちぼちかなって」

洋一郎「みーちゃん普通にモテそうなのに」

実也子「そんなことないですよ。彼氏も一年くらいいないし」

洋一郎「何で別れたの？」

実也子「まぁなんかお互い忙しくなってすれ違うようになって、みたいな。大学の時から付き合ってたんで、学生と社会人のギャップっていうか」

洋一郎「あー、あるよねぇ。俺も元カノがさ」

○同・店前（夜）

実也子・洋一郎、出てくる。

実也子「やっぱ半分出します」

洋一郎「いいって。みーちゃんそんな飲んでないんだし」

実也子「じゃあ少しだけでも」

洋一郎「大丈夫、大丈夫！」
実也子「じゃあ何かコンビニで飲み物とか」
洋一郎「大丈夫だって！　代わりと言ってはなんだけど」
実也子「……はい」
洋一郎「また会ってくれませんか？」
実也子「え？」

○料理教室・キッチン
　ののか（２４）、ニンジンの皮を剥きながら、
ののか「へー、アプリの人と付き合ったんだ」
　京香（２３）、ジャガイモを持ってきて、
京香「どんな人ですか？」
実也子「いい人だよ。うん、いい人」
京香「特徴がないってことですね」
ののか「そういうのがいいじゃない。そろそろ結婚を意識した付き合いをしていかないと」
京香「さっすが婚約中」
実也子「ののかはそこらへん器用だよね。スーっといつの間にか幸せルート行って」
ののか、左手の薬指を二人に見せつける。
京香「うわっ、眩しい」

○同・休憩室
　クリームシチューを食べている一同。

京香「そういや私もちゃっかり幸せルート入りかけてて」
ののか「えー、どんな人？」
京香「白金生まれ白金育ちなんですけど」
ののか「何ボンボン？　プライド高そー」
京香「温室育ちなんでちっちゃい虫にもギャーギャー騒ぐんです」
ののか「それがきもいってなってないあたり、相当惚れてるな？」
京香「ういっす」
　京香、実也子の視線に気づいて、
京香「切り替え早いなぁとか思ってます？」
実也子「えっ、いやそんな」
京香「人は別れて出会っての繰り返しなんです。いつまでも過去ばっかり見てらんないですよ」
実也子「……そうだね。おめでとう」
京香「あざっす」

○水族館・館内
洋一郎「水族館なんて久々だけど、ここきれいだしいいね」
実也子「だね」
洋一郎「ちょっとお腹空かない？　なんか食うとこあるかな」
実也子「あ、それなら売店が向こうに」

洋一郎「あれ、実也子ちゃんは来たことあった？」
実也子「大学の時に元彼と。あ、ごめん」
洋一郎「うん？　何が？」
実也子「余計なこと言っちゃって」
洋一郎「お互い大人なんだしそれなりに経験あるでしょ。いいよ、元彼の話くらい」
実也子「ごめんね」
洋一郎「謝んなくていいって。いろんな恋があって、今の実也子ちゃんになったんだし。俺はそんな実也子ちゃんが好きになったんだし」
実也子「……うん」
洋一郎「あ、でも嫉妬はするからね？　あんまいじめないでね？」
実也子「（笑って）はい」
実也子・洋一郎、手を繋いで歩き出す。

〇ドレスショップ・試着室
ウエディングドレス姿ののか。
ののか「どう？」
実也子「いい！　きれいだよ」
ののか「やっぱり？　じゃあこれにしよー」
実也子、部屋を見渡す。
ののか「実也子も着たくなった？」
実也子「えー」

○カフェ・店内

実也子「今の彼氏とはさ、恋愛をするために出会ったわけじゃん。だから結婚とかも自然と考えるんだろうけど」

ののか「実也子はまだそこまでなってないわけだ」

実也子「本当に悪いんだけど、他にもっといい人がっているんじゃないかって」

ののか「結婚は妥協だよ？　先の人より目の前の人のこと考えなきゃ。もちろん後ろの人のことよりもね」

実也子「……」

ののか「あ、ごめん。余計なこと言ったわ」

実也子「え、別に。何が？」

ののか「あのさぁ、結婚式、汰一も呼ぶんだけど」

実也子「うん。全然問題ないよ」

ののか「悪いけど私の結婚式だし、そこまで配慮できないから」

実也子「もちろん。こっちは全然大丈夫。悪い別れ方じゃなかったし、周りにも気を遣わせないから」

ののか「よろしくね。あ、受付も」

実也子「はい」

○駅・改札口前

実也子「じゃあ準備頑張ってね」

ののか「うん、またー」
実也子、改札を通っていく。
ののか「あ、あいつのことは……いっか」

○マンション・キッチン（夜）
鍋を火にかける実也子。
洋一郎「ご祝儀はピン札じゃなきゃだめだからね。ちゃんとある？」
実也子「うん、ある」
洋一郎「他は？　分からないことある？　何でも聞いて」
実也子「さすが」
洋一郎「この歳になると結婚式行きまくるからね」
実也子「あー、そっかぁ。ちょうどそういう歳か」
洋一郎「うん」
実也子「はい、できたよー」

○同・リビング（夜）
シチューが並んでいる食卓。
実也子「いただきます」
洋一郎「実也子ちゃんは結婚願望とかある？」
実也子「んーと」
洋一郎「俺は実也子ちゃんと結婚したいと思ってるよ」
実也子「え」
洋一郎「付き合って日が浅いけど、これ以上の子なんて

いないから。本当にそう思ってる」
実也子「そっか……」
洋一郎「ごめんね！　こんな急に話して！　いただきます！」
洋一郎、シチューを食べる。
洋一郎「おいしい！　実也子ちゃんはいいお嫁さんになるね！　あ」
実也子、苦笑いする。

○結婚式場・ロビー
受付にいる実也子と京香。
京香「実也子さん今日気合入ってませんっ？」
実也子「え？　そんなことないけど」
京香「さては新郎側のゲスト狙ってますね」
実也子「違うよ」
京香「あ、来た」
女性1・2、受付に来る。
女性1「わー、久しぶりー」
実也子「久しぶり」
女性2「ちょっと痩せた？」

×　×　×

実也子、周囲を見渡す。

周囲には談笑している人々。
実也子、名簿をパラパラとめくる。
京香「今日二次会から来る人も多いそうですよ」
実也子「あ、そうなの？」
京香「はい」
実也子「そっか……」

○レストラン・店内（夜）
高砂席にいるののかと新郎。
実也子・京香、ののかの隣に立つ。
汰一（２４）、新郎側に立つ。
ふと目が合う実也子と汰一。
男性「はい、撮るよー」
実也子・汰一、目をそらし正面を見る。

×　×　×

席でシャンパンを飲む実也子。
男性たちと談笑している汰一（２４）の姿が見える。
京香、料理を持ってきて実也子の隣に座る。
京香「よかったですね。汰一さん全然気にしてない感じですね」
実也子「そう、だね」

○同・廊下（夜）

実也子、トイレから出て来る。

汰一、歩いてくる。

実也子「あ」

汰一「あ」

実也子「久しぶり」

汰一「元気？」

実也子「うん。そっちは？」

汰一「元気だよ」

実也子「そう」

汰一「じゃあ」

汰一、トイレに入ろうとする。

実也子「え」

汰一「うん？」

実也子「……私も結婚するかも」

汰一「え」

見つめ合う実也子と汰一。

汰一「あー、よかったね。おめでとう」

汰一、トイレに入ろうとする。

実也子「今なら私、辞める気がする」

汰一「え？」

実也子「結婚するなって汰一くんに言われたら、私しないよ」

汰一「いや、そんな。言うわけないじゃん。俺も彼女い

るし」
実也子「……そっか」
汰一「もう俺そこまで実也子の人生に関わるほどの気持ちないよ」
実也子「そうだよね」
実也子、ため息をつく。
実也子「ずっと一緒にいるって言ったのにね」
汰一「人は変わるでしょ」
実也子「まぁそうか」
汰一「……結婚、したくないの？」
実也子「別に。汰一くんの次に付き合った人とだから、ちょっと考えちゃっただけ」
汰一「考えんなよ。今幸せなんでしょ？」
実也子「……うん、幸せ」
汰一「うん」
汰一、トイレに入る。
実也子、ため息をつく。

○同・男子トイレ
汰一、立ち止まる。

○同・店内（夜）
席を回ってゲストとツーショットを撮るののか。
ボーっとしている実也子。

ののか、実也子の席に来て、
ののか「実也子ー、写真！」
実也子「あ、うん」
ののか、実也子と写真を撮る。
ののか「実也子も幸せになりなね。目の前の人のこと大事にしてさ」
実也子「……うん」
実也子、汰一の方をチラッと見る。
実也子から離れた席に座っている汰一。
ののか「京香ー」
京香「ののかさーん！　ブーケ私が欲しかったー」
ののか、京香の席に向かう。
ふと目の前の席を見る実也子。
誰も座っていない。
実也子「……」
実也子のことを見つめる汰一。

○同・出口（夜）
ドアベルが鳴り、ドアが開き、男女数名が出てくる。
実也子、京香を支えながら出てくる。
実也子「ちょっとちゃんと歩いて」
京香「大丈夫ですー、かれぴに迎えに来てもらうんだからぁ」

男性「タクシー乗る人ー？」
京香「あ、この子乗せるー」
談笑している人々。
汰一、実也子に近づいてくる。
実也子、汰一に気づく。
対峙する実也子と汰一。
汰一「相手って？」
実也子「……三つ上の公務員」
汰一「そう……」
男性の声「タクシー来たよー」
実也子「あ、はーい！」
汰一「――幸せになってね」
実也子、汰一を見つめる。
実也子「……どーも」
実也子、京香を連れて行く。
実也子「（ぼそっと）幸せにしてくれなかったくせに」
実也子の背中を見送る汰一。
ドアベルが鳴る。
汰一、レストランのドアの方を向く。

○マンション・玄関（夜）
洋一郎、ドアを開ける。
実也子、立っている。
洋一郎「わー、かわいい。楽しかった？」

実也子「うん」
実也子、洋一郎に抱きつく。
洋一郎「実也子ちゃん？」
実也子「私と結婚してください」
洋一郎「えっ？　えっ？」

○カフェ・店内
席に座っている実也子・ののか。
実也子「すごくいい式だった」
ののか「ありがと。そうだ」
ののか、スマホを取り出す。
ののか「これこの間の写真。見ていいよ」
ののか、実也子にスマホを渡す。
実也子「わー、いいね」
実也子、スマホ画面をスクロールする。
ふと手を止める。
画面には、ののかが映っているが、隣は不自然に空いている。
実也子「これ」
ののか「あー、あいつやばいよね。似合わないパーマとかかけちゃってさぁ」
実也子「ヨウスケ？」
ののか「え、まだヨウスケのこと見えないの？」
実也子「うん」

ののか「汰一、のことは見えてるんだよね」
実也子「見える」
ののか「何でヨウスケだけ」
実也子「何でだろ……」
ののか「ま、いいじゃん。あんなクズ。記憶から消えてる方が正しいよ」
実也子「そうかな」
ののか「そうでしょ。何、まだヨウスケに未練あるの？」
実也子「違うけど。ただ、どんな顔だったか、声だったかなって」
　ののか、ため息をつく。
ののか「実也子の中でヨウスケ美化しすぎじゃない？」
実也子「え？」
ののか「あいつが今までどんなことしてきた？　忘れたなら思い出させてあげようか？」
実也子「いや、いいです」
ののか「もし仮にヨウスケのこと見えるようになってもがっかりするだけだよ。あいつ喋る内容バカだし顔も言うてかっこよくないよ？　髪型でごまかしてるだけじゃん」
実也子「分かった。分かったって」
ののか「もうヨウスケのこと、見ようとしなくていいんじゃない？」
実也子「……」

ののか「ていうか実也子は元彼を美化するくせがある！
汰一だってそう。あんなメンヘラどこがよかったの？」
実也子「えー、そう思ってたの？」
ののか「あんな女々しい男、別れて正解」
実也子「そこまで言う？」
ののか「元彼なんて悪口しか出てこないね。ひとり前は
ギリきもいけど、ふたり前キモキモだね」
実也子「えー……」
ののか「元彼ってゴキブリだからね？」
実也子「ゴキブリって……」

〇同・店前
実也子・ののか、出て来る。
ののか「結構おいしかったね」
実也子「ねー」
ののか「んじゃ帰るかー。あー、夕飯の準備めんど」
実也子「あ、そういえば私結婚しようと思って」
ののか「え！　プロポーズされたの？」
実也子「されたっていうかしたっていうか」
ののか「もー、何でもっと早く言わないの？　その話し
たかったのにー。ゴキブリの話とか無駄だったよー」
実也子「（苦笑いして）そうだね」
ののか「結婚式やるんだったら何でも聞いて」
実也子「心強いわ」

ののか「結婚式には元彼呼ぶなよ」
実也子「呼ばないよ」
ののか「どっちもね」
実也子「うん」

○ショッピングモール・店内
歩いている実也子と洋一郎。
洋一郎「実也子ちゃんって指輪のサイズ何？」
実也子「えー、何だろう。分かんないかも」
洋一郎「えー、それじゃあ婚約指輪買えないじゃん」
実也子「それ言っていいやつなの？」
洋一郎「あ、そっか。嘘、嘘。忘れて！」
笑う実也子。
洋一郎「（気づいて）実也子ちゃん、あの人知ってる人？」
実也子「え？」
洋一郎「実也子ちゃんのこと見てる男の人いたから」
実也子「え」
実也子、洋一郎が見ている方を見る。
男性がこちらの方を見ている。
実也子「……いや」
男性の背中から京香が顔を覗かせる。
実也子「京香ちゃん」
京香、男性を連れて駆け寄って来る。
京香「驚かせようと思ったのにー。あ、これ彼氏です」

男性「初めまして」
実也子「あ、初めまして。（洋一郎に）大学の後輩」
洋一郎「こんにちは」
京香「実也子さんがお世話になってますー」
実也子「保護者か」
京香、実也子に耳打ちして、
京香「今までで一番かっこいいじゃないですか」
実也子「はいはい」
洋一郎「うん？」
京香「今までで」
実也子、慌てて京香の口をふさぐ。

○カレー屋・店内
メニュー表を見ている洋一郎。
洋一郎「んー、激辛はさすがに辛いか？」
実也子「市販のルーの辛口くらいだよ」
洋一郎「本当？　じゃあいけるかな」
実也子「大丈夫、大丈夫」
洋一郎「あ、ていうかここ来たことあった？　ごめんね、別の店がよかった？」
実也子「ううん。来たって言っても大学のときだし」
洋一郎「あ、例の元彼か」
実也子「もー」
洋一郎「野暮だったね。ごめん、ごめん。あ、ラッシー

もある」
実也子、メニュー表を見る。
ふと気づいて考え込む。
洋一郎「実也子ちゃん、決まった？」
実也子「あー、うん。どっちにしようかなって」
洋一郎「何と何で迷ってんの？」
実也子「バターチキンと牛すじ」
洋一郎「前食べたのは？」
実也子「……もう決まった」
洋一郎「どっち？」
実也子「バターチキン」
洋一郎「お、いいねぇ。（店員に）すみませーん」
実也子「（ぼそっと）前食べておいしかったから」

○マンション・寝室（夜中）
ベッドで眠っている実也子・洋一郎。
実也子、寝返りを打つ。
目を開き、ため息をつく。

○同・洗面所（夜中）
床にしゃがみこみ、スマホを見ている実也子。
スマホを耳に当てる。
呼び出し音が流れる。
呼び出し音が切れ、

実也子「……会いたい」

○公園（早朝）

ベンチに座っている実也子。

スマホを見る。

画面には『ようすけ』とのトーク。

実也子が現在位置を送っている。

『既読』がついている。

実也子、周囲を見渡す。

誰もいない。

実也子、ため息をつく。

うつむいて靴の汚れを払う。

風が吹き実也子の髪を揺らす。

実也子、ふと顔を上げる。

誰もいない。

実也子「……他の女の子と連絡取られるのがすごく嫌だった。元カノと旅行行ってるのが嫌だった。飲み会行くって言って昼まで連絡取れないのが嫌だった。私って絶対本命じゃないんだなって思い知らされるから。もっと、好きだと思われてたら、こんなことなかったんだなって。私じゃないんだって思い知らされて嫌だった」

犬の散歩をしている人が通る。

通り過ぎていく犬を見つめる実也子。

実也子「でも私、すごく好きだった」
実也子、正面を向く。
誰もいない。
実也子「これ以上ないってくらい、好きだったよ。だから」
実也子、微笑む。
実也子「だからもうバイバイ」
実也子、立ち上がる。
出口に向かって歩いていく。
車のドアの開閉音。
実也子、立ち止まり、振り返る。
誰もいない。
実也子、微笑み歩き出す。

○マンション・リビング（早朝）
実也子、静かに入って来る。
洋一郎、寝室から出て来る。
洋一郎「どこ行ってたの？」
実也子「ちょっと散歩」
洋一郎「そう」
洋一郎、あくびをして寝室に戻る。

○同・ベランダ（早朝）
実也子、出て来る。

伸びをして、空を見上げる。
スマホの着信音。
実也子、スマホを見ると、『ようすけ』からラインが来ている。
スマホを操作する実也子。
『幸せになってね』と送られてきている。
実也子「ヨウスケ……」
実也子、スマホを見つめて、
実也子「キッショ」
実也子、『ようすけ』をブロックし、連絡先から削除する。

○街中
多くの人々が行き交う。
子ども「ママー」
実也子（28）、子どもの顔を覗き込んで、
実也子「どうしたの？」
子ども「あの人誰？」
実也子、子どもが指さす方を見る。
が、誰もいない。
実也子「……」
実也子、微笑んで、誰もいない方に向かって中指を立てる。
実也子「さ、パパおうちで待ってるよ」

実也子、子どもの手を引いて、歩き出す。

子ども「ママ、さっきの何？」

実也子「うん？　幸せになってねって意味」

子ども、真似して中指を立てようとする。

実也子「（慌てて止めて）やめなさい」

【終】